

# 喝采

磯崎 美聡

薄いガラスの回転扉の前に、その時私は立っていた。ガラスが曇っているせいで、私は向こうが見えない。どこにいくのかわからないうちに扉を押すのは不安だ。私は躊躇する。しかし私はそれを押さなければいけないとわかっている。私の右手が操り人形のように動き、扉に押しつけられる。なんて小さな手だろう。こんなに小さい手を使って私は日々生活していたのだろうか。まるで、赤ん坊のような手だ……赤ん坊の手が扉を押す。扉はあっけなくくると回り、私は扉の向こうへと突き飛ばされた……。

「ねえ、大丈夫？」

はっと我に返る。目の大きなショートカットの女の子が、私の顔を覗き込んでいた。

「うん。ちょっとぼおっとしちゃって」

そう言うと、最近多いねえ、と彼女は笑った。

「疲れてるんじゃない？ 目が充血してるよ」

さっきこすったからだとも言えず、私は曖昧に笑った。

「季節の変わり目だし、気を付けた方がいいよ」

そういって、彼女は去っていく。背の高い彼女の後ろ姿をぼんやり見ながら、ふと、羨望を覚えている自分に気づく。机に置かれていた細く長い指、きびきびとした立ち居振る舞い、すらりとした体つき。爪が綺麗に伸ばされ、薄くマニキュアまで塗られていたのを私は見逃さなかった。机から教科書を出しながら私は自分の手を見る。ぎりぎりまで短く切られた爪、早くも乾燥してしわが寄った皮膚、太く短い指。握っているのは世界史の教科書、ノートにははつきりと「高一」の文字。

私はいつ、あの回転扉を押したのだろう。曇ったガラスの向こう、見えない世界に、放り出されたのはいつだったろう。

さっき想像の中で触れたガラスの感触を確かめるように、私は右手を伸ばす。ひやりとした感触。硬い質感。私はそれを確かに憶えている。後戻りはできないんだと思った。私はこうやって誰かによって分類される。あの回転扉は、決して反対に回ることはないのだ。私は口をつぐんで、この世界で生きてゆかない。

始業のチャイムが鳴って、私は立ち上がった。

\* \* \*

鐘が鳴っている。高く、低く、歌うように。その音は広い建物の隅々まで響き渡る。あれは全ての用意が整ったという合図。そしてもうすぐ、塔の前の広場に民衆が詰めかける。餌に飢えた動物のように、篝火に惹かれる蛾のように、それは騒音をふりまきながら広場を埋め尽くす。カーテンの陰では、蛇の目をした貴族たちが一つの時代が終わる——もつと言えば彼らの時代が来るのを今か今かと待ち望んでいる。そしてその前に引き据えられる一人の道化——。

扉が激しく叩かれた。返答も待たずに開けられたドアの向こうには兵士が三人。一番前のひげを生やした男が口を開いた。

「時間です」

私はゆっくりと立ち上がった。足元でガウンが衣擦れの音を立てる。その色が深紅だという事に気づいて一人は息をのんだが、最初の兵士はちらりとこちらを見ただけで何も言わなかった。

ながい、長い階段を下る。出たのは水門でそこでは兵士が二人がかりで鉄の綱を引いている所だった。私の姿を見ると恭しく礼をする。私も目で小さく礼を返すと、二人は驚いた顔になった。今日は特別だ。部屋から付き添ってきた兵士たちに手伝ってもらい、ともづなに繋がれた小舟に乗った。一人が綱をとくと、綱はするりと杭から抜け、よどんだ水底へと沈んで行った。替えの綱はあるのかしら、と思う。ないと帰って来る時に困るだろう。ガウンの裾が濡れてしまう。そして思い出した。帰りの船など必要ないのだということを。

やがて、蝶番に油を差し忘れたドアのような音を立てて水門が開いた。鋭い歯のような鉄格子が私を威嚇する。三ヵ月ぶりに見るこの景色、この道。叫び、がなり立てる群衆。今、この国のすべての憎しみが私に向いている！

不思議と恐ろしくはなかった。ただ、静かな気持ちだった。喧騒はダンスの時に流れる吟遊詩人のハーブのように、体のはるか後ろで鳴っているような気がした。懐かしい街並が目の前を過ぎてゆく。安らかな心で、私はなぜか、今まで囚われていた小部屋の扉の事を思い出していた。隙間風の多い部屋だった。扉はまるで駄々をこねる子供のように、風が吹けば耳障りな音を立てた。朝夕の食事のために開けられるときも、扉はいちいち悲鳴を上げた、薄い、磨かれてもいないただの木の板。

しかし、結局はあの扉が私の運命をつかさどっていたのだ。

フードからはみ出た黒髪の一房が、そよ風に吹かれて揺れている。

\* \* \*

向かい風に煽られる前髪をかき上げながら坂を下っていると、後ろから声を掛けられた。

「一緒に帰らない？」

彼女だった。

「いつもは誰と一緒に帰ってるの？」

「誰とも。うちの期、こっちの方面って少ないみたいで、高二高三の人たちは見掛けるんだけど、同期はちつともいないので」

「私も今まで自分だけだと思ってた。意外ね、おんなじクラスにいたなんて」

「そうね。でもまだ五月だし。誰がとっち方面かなんてまだ分からないよね」

私が言うと、そうね、まだ五月ね、と言って彼女は微笑んだ。並木の緑が目にはいたいほど鮮やかだ。真新しい制服の胸元には若葉よりも鮮やかなエメラルドグリーンのサテンのリボンが、木漏れ日につやつやとひかっている。なにはともあれ、まだ高校生活は始まったばかりなのだった。受験と受験の合間のエアポケットのような時間。少しだけ心の休まるとき。これは違うな、と私は心の中で訂正した。昨日塾の先生にもっと受験を意

識しろと言われたばかりだった。そんな殺生な……と、何かの本で読んだセリフを呟く。

「ん？　なんか言った？」

「何でもない。なんかね、いろいろと思い出しちゃったの」

いろいろ、ね。と彼女が呟く。よく人の言葉を反芻する人だ。そういえば、彼女の名字は何だっけ？　そつと肩にかけられた鞆を盗み見る。校章の隣に、H I R O T A ・ S とある。そうだ、広田さんだった。私は出席番号が早いので、せいぜい十番台までしか名前と顔が一致しないのだ。

「この後、時間ある？」

いきなり声をかけられて驚いた。

「うん。私今日はひまで。駅向こうの本屋でじっくり立ち読みしてから帰ろうと思っていたところ。帰っても誰もいないし」

「そっか。あのね、ここから二本通りを向こうに行ったところにカフェが一軒あって、入学したところから気になってたんだけど、こないだ寄ったらとっても素敵のところだったから、一緒に行けたらいいなと思ったの」

私は躊躇した。人と話すのは得意ではないし、まして、今日初めて一緒に帰る彼女とカフェで話したとして、間を持たせられる自信がなかった。冷めたティーカップを前にして、気まずそうに身じろぎする自分の姿が目に見えるようだ。

冷めたティーカップがふたつ。向かい合って座る少女と男。

指輪の入った箱。

どこかで見たような映像。男の指は早くこれをはめろとでもいうように、少しずつ箱を前へ押し出してくる。

「どうしたの？　急に黙っちゃったけど」

彼女の声で我に返った。

「ごめん、私やっぱり今日は本屋に行くわ。よかったら明日一緒に行かない？」

「分かった。明日ね」

並木道は終わりに近づいていた。コンクリート造りの建物に駅名だけがそっけなく書かれた駅舎に入る。地下鉄の彼女は右

の改札、裏口に抜ける私はまっすぐだ。

「じゃあね」

「うん、また明日」

手を振って別れた時、彼女の笑顔がなぜか日に残った。こんな笑顔を、私は確かにどこかで見た。

\*

\*

\*

薄暗い部屋に男と少女が一人座っている。先ほどから少女は一言も口をきかず、男の声だけがコントラパスのように低く響いている。豪華な絨毯と精緻な彫刻の施された柱や天井、部屋のあちこちには色とりどりの花や重厚なオーク材の家具。華やかな応接室だ。しかし、この部屋はどこか陰気だった。窓の外に見える、この地方にしては珍しいほどの晴天が、その暗さを一層印象付けている。そしてその原因となっているのは今、テーブルを挟んで少女と話しているこの男なのかもしれない。

派手な縫い取りのある上着は一日で価値のあるものと分かる。首のレースの襟飾りの上には波打つレースに負けないほどの二重あごがあり、豚のように上向いた鼻と茶褐色をした唇の上には、肉にめり込んだ二つの小さな目が、狡猾さと酷薄さを兼ね備えて光っている。その小さな目は、最前から少女を見つめて動かない。

「貴女はこの国のすべてを手中に収めるのだ。それに何の不满があるのかね」

静かだが有無を言わさぬ響きを持った男の言葉を、少女は受け止めかねた。水色のガウンの上に重ねられた手を見る。小さい華奢な手だ。少し骨ばってさえいる。この手に、あの指輪がはめられる……そう思うと暗い気持ちになった。この国のすべてが手に入るといっても、それによって得をするのは自分ではない。そのことを少女は知っていた。誰が一番豊かになり、権力を持つのか。それは目の前にいる、この叔父だ。

「一族の手駒になるのは嫌だと思っているのだろう」

見抜かれていた。少女はなすすべもなく下を向く。

「裏で指揮を執るものがいるとしても、あくまで最高の権力を持っているのは貴女だ。我々はそれなりの敬意をはらわせてもらう」

嘘だ。そう知っていても言わなかった。少女は自分の左手を見つめる。この手に、平凡な指輪がはまると思っていた。誰かを愛して、結婚して、平凡な幸せと平凡な家庭が、自分にも約束されていると思っていた。私は人形にも、道化にもなりたくはない。しかし……。

白いクロスの上に出した左手が答えだった。男は口元に笑みを浮かべた。蛇のような笑みだ。

「それでこそ、わが一族の女だ」

男の太く短い指が、箱から指輪をつまみ上げる。恐る恐る出した手をぐいと掴むと、彼は薬指に指輪をはめた。それは大きすぎた。落ちないように少女は反射的にこぶしを握った。

「それでいい」

男の満足そうな声が聞こえる。

王のしるしの指輪がはまった自分の手に、少女は確かに白骨の幻を見た。

\* \* \*

ふっと黒いものが目の前を横切った。青空を背景にして黒い揚羽蝶がひらひらと飛んでゆくところだった。まだ五月なのに、気の早い蝶だ。一筋走ったエメラルドグリーン線を、陽光にきらめかせて空に吸い込まれた。

あれ……今消えなかった？

辺りを見渡しても蝶はどこにもいない。

首を小さくかして私は自動ドアを開けた。小さく流れる音楽。ドビュッシーだ。縦に何列もずらっと並ぶ本棚の向こうで、深緑のエブロンをかけた店員が暇そうに頬杖をついて雑誌をめくっている。私のほかに人影はなさそうだった。平積みになっ

ている本の一つを手取る。『合わせ鏡の夜』、筆者名を見ると最近はやりの男性作家の名が仮名文字風に崩されて書いてあった。表紙は闇を背景に豪華な打掛をぞろりと着こなし、頭に簪をびっちりとした女の横顔だ。江戸物だろうか。その隣には刑事物のシリーズの最新刊や、映画化予定の小説が華やかなポップと共に並んでいる。

三つ目の棚からはライトノベルと漫画だった。すでに三冊の本を抱えた私は、誘惑の種になる原色系のイラストをやり過ごして足早にめあての場所へ急ぐ。九列目の棚の向こうの一つだけ壁にくっつけられた棚——そこは画集のコーナーだった。

今東京で展覧会が開かれているという日本画家の画集復刻版や、展覧会のパンフレットが最前列を飾っている。深紅の地のまん中で白い孔雀が体をくねらせている。精緻な羽毛が風にそよぎそうだ。その斜め下には白い象が、左側にある何かに向かって鼻を高々と掲げている。これは私も見たことがある。屏風絵か何かではなかったか。二列目から後ろは日本と西洋が半々に分かれて時代順になっている。『黒田清輝名画集』『フェルメールの謎』……『フォント大解剖』というのもある。これは画集に入るのか？ 色とりどりの表紙や背表紙の中の一つにふと目が吸い寄せられた。——『中世の名画』。

黒地に落ち着いた黄色の文字。字体も明朝体だ。抜いてみると、表紙は男の肖像画だった。背景の闇から抜け出てきたかのように、着ているものも、帽子の羽根飾りも黒い。蒼白い顔の中で、女のように赤い唇だけが目についた。最初の紹介文を飛ばして絵の写真のページを開けた。

——私はこの人を知っている。

天啓のようにその言葉が降ってきた。画面中央に、純白のドレスを着た若い女性がいる。女は司祭に手を取られ、薬の上にひざまずこうとしている。目隠しをされているので顔ははつきりとは見えない。しかし私は確かにその顔を知っていた。キャプションに目を走らせる。ドラローシュ、『レディ・ジェーン・グレイの処刑』。

怖い。追っ手が迫ってくる。私はここにはいけないのだ。

早く逃げ出さなくては。

景色がぐるぐると回り始める。女の白いドレスが目には焼き付いて離れない。右には赤いズボンをはいた首切り役人。左には……左の隅になにかがある。それを見定める前に目の前が真っ暗になった。

\* \* \*

緋色の絨毯の上を黒いブーツが歩き回る。磨きこまれた皮と留め金は、高い窓からの陽光で輝いている。苛々した足音はいくら上等な絨毯とはいえ隠しようがなかった。

「メアリが反乱を起こしたらしい」

中央に置かれた大きな机の周りを忌々しげに歩き回りながら吐き捨てるように叔父はその言葉を口にした。

椅子の一つに少女は座っていた。いや——もう彼女は少女ではなかった。顔も体つきも見違えるようにふつくらとし、貴婦人としての自信のようなものが漂っていた。二週間前の地味なガウンとはうって替わって、目の前の叔父に負けないほどの豪華なガウンを着、深紅のマントを羽織っている。それが彼女に不思議な威厳を与えていた。

「わが軍は負け通しだ。卑怯な女め」

叔父はいらいらと頭をふった。真剣な顔とは対照的に襟飾りがのんびりとふわふわ揺れる。それがなんだかおかしくて、彼女は思わずくすりと笑った。叔父はこちらを振り向いて悪魔のような形相で彼女のほうを睨む。

「わしがお前のために困っているのがそんなにおかしいのか」

お前のために。ですって。心の中で彼女は笑う。私を王位につけたのは叔父様でしょう？

叔父の矛盾を笑えるほどの余裕が彼女にはあった。彼女の心はすでにそこにはなかった。いつか来るだろう

「明日」に向かって開いていた。一族の権力のために道化となることを決心したあの日から、彼女はそれを空想するのが好きになった。そこは今とは全然違う世界だ。もしかすると今からずっと先の時代かもしれない。強欲な親戚も、高貴な身分もなく、私は自由だ。小さい頃一度だけノーフォークまで馬車にゆられて旅したことを彼女はなつかしく思い出す。あの時畑の周りに並んでいた家は、小さな煉瓦造りだった。冬だったので、赤い頬をした子供たちが雪まみれなって遊んでいた。町の中心の広場では、井戸のそばに女たちがたくさん集まって、水を汲んだり洗濯をしたりしながらおしゃべりに花を咲かせていた。その訛りの強い大きな声が馬車のカーテン越しにまではっきりと聞こえた。

皆貧しそうだった。けれども幸せだった。少なくともその時の彼女にはそう見えた。今からずっと後の時代にも人々はあのようににぎやかに暮らしているのだろうか。それなら、私はそんな家に生まれたい。大粒の宝石の代わりにたくさんの笑顔が、策謀のかわりに思いやりがある、そんな家に、そんな場所に身を置きたい。もしかすると家や周りの風景は大きく違っているかもしれないけれど。服さえ違ってもいい。こんなにたくさんの布地を使わずに、もっと簡素に、もっと軽くなって……。業を煮やした叔父が机をたたき、彼女の空想は途切れた。

「お座りになりませんの、叔父様？　ずっと立ったままですとお疲れになりますわ」

「わしに指図できるとはお前もずいぶん偉くなったものだ」

棘のある言葉を笑顔で受け流すと、彼女は手をたたいて侍女の一人を呼んだ。衣擦れの音が聞こえ、深緑のガウンと揃いのフードを付けた女が彼女の前にひざまずく。

「お呼びでございますか」

「飲み物を持ってきて頂戴。私にはエール、叔父様にはワインを」

彼女が去ってゆくを見届けて、男は椅子の一つに乱暴に腰を下ろした。

「状況はそんなに悪いのですか」

「お前が想像も出来ないくらいにな。メアリが反乱を起こしたとなれば、妹のエリザベスも黙ってはいないだろう。あの悪女で名高いアンと、ヘンリー王との子なのだからさぞかし……」

侍女が入ってきて会話が途切れた。盆の上に載せた二つのゴブレットと、エールと赤ワインの入ったボトルが目の前に置かれた。コルクを抜き、それぞれのゴブレットに飲み物が注がれる。

「下がついていいわよ」

一礼した侍女が廊下の向こうへ消えると、彼女は叔父のほうへ顔を向けた。ゴブレットを掲げて艶然と微笑む。

「叔父さまの健康を祈って」

一息で飲み干すとしぶしぶ叔父もそれに倣った。

「もうすぐ奴らはここまで来るかもしれない」

ひげについたワインを手の甲で拭いながら叔父は言った。

「そんなに早く」

「何かがあったら伝令をよこすように命じてある。来ないということは良くなったのかそれとも悪くなったのか……」

「運任せという事ですか」

「そうではない！」

叔父は再び彼女を睨み据えた。

「いいか、反乱軍も、状況次第で十字軍になるのだ。そうしたらわれわれはどうなる？ 今度はこちらが反逆者だ。捕まったら一族みな殺しだ。お前もアンのように処刑されるぞ。分かっているのか」

処刑——斬首。アンのように。肖像画でしか見たことのない女の顔が脳裏に浮かんだ。彼女もまた、道化だったのだろうか。深紅のガウンを着て首を斬られたという彼女も？

テーブルの上の赤ワインの瓶が、光を含んで輝いている。

\* \* \*

「全くもうびっくりしちゃったわよ。翌朝登校したら先生に青木さんが休みですって言われて、それで三日も来ないなんて。風邪？」

「そうなの。あの後本屋に行ったでしょ、私。そこで立ちくらみしちゃって。店員さんにもすごく心配されたんだけど、何とか家まで帰って。それでギブアップって感じ」

「まっとうな病気でよかったよ。私一瞬五月病かと思ってさあ、なんかこの間教室でだるそうだったし、一緒に帰ってた時ちょっと暗かったし」

「そんなことないって」

「声かけちゃって悪かったなあとか考えたんだけど。元気そうだからいいや」

「そうね。どちらかという存知熱かな。熱は一日寝てれば引いたし、本屋ですごいいい本買ったから、それかもしれない。これだ——って思ったから」

「もうその本読んじやった？」

「ん？ まだ」

実を言うとあれから開く勇気がないのだ。逃げるように会計を済ませて駅に行き、電車に乗り込んだとき、あの画集も一緒に買ってしまっていたことに気づいた。本が迫ってきた。そう思った。この時体が火照って熱が一気に出たのだ。「すごいいい本」かどうかは分からないが、そういう事にしておく。

「それは羨ましい。どんなの？」

「えっと、画集なの。だから読むものではないというか……」

「そうね。どっちかというに見るって感じだね。あ、その角を左」

街路樹の植わる、どことなく洒落た雰囲気の漂う通学路を一本はずれると、そこは普通の商店街だった。平べったい円錐形の傘の下らの丸い電球をつけた背の高い街灯が等間隔に並び、錆びた鉄の柵が道路と歩道を仕切っている。もう六時近いからか、シャッターを下ろしている商店が目立った。

「ここって一本外れると全然雰囲気が変わるのね」

「そう。なんか通学路は現実離れした感じがあるけど。周りは

樹が植わってるし、石畳だし」

「どれだけあの街路樹が目隠しの効果を發揮しているか分かるわね」

そんな話をしながら二つ目の通りを右に曲がる。シャッターが半分閉まった靴屋と花屋の間にその店はあった。花の形のランプシェードが、淡い光を放っている。ペンキで書かれた店の名前はかすれて読めなかった。

「ここ」

店のドアまでの三段の階段を上る。ステンドグラスの嵌めこまれたドアを彼女が重そうに引き開ける。からん、と鈴が鳴って私たちは中に入った。橙色の間接照明。シックなこげ茶の調度品と黒い革のスツールが上品だ。

案内された二人掛けの席に座ると、壁に絵が懸かっているのが目に入った。

「いい絵ね。私前回この席に座らなかったから分かんなかった」

私の前の椅子に腰を掛けて彼女は絵を見つめる。私も振り向いて、すぐ後ろの壁に懸かった絵を見つめた。青と灰色の混ざった曇り空のような背景。その中に一人の道化の恰好をした少年が横笛を吹いている。だぶだぶの赤いズボン。大きすぎるジャケットには大仰な金ボタンがずらりと並び、金色の羽根飾りのついた帽子をかぶっている。どこからどうみても楽隊についてく道化だ。しかし、その顔が妙に冷たいのだ。目に感情がない。

——私は人形にも、道化にもなりたくはない。

「なににする？ 紅茶、それともコーヒー？」

「紅茶。アールグレイで」

「じゃあ私もそうしょ。チーズケーキをつけて」

「あっそれいま私が言おうと思ったのに！」

「二つ頼めばいいでしょ」

「一緒に面白くないもん」

騒ぎつつもチェリーパイで手を打つことに決定する。

「まったく高校生にもなって子供っぽいね」

「お互いさまでしょ」

品物が運ばれてくる間、私たちはしばし無言で店の中をみまわっていた。私はカウンターの中で動き回る初老のマスターの

背中を追い、彼女は道化の絵を凝視している。奇妙な沈黙だった。カウンターのなかからこぼこぼと何かが湧き出るような音が聞こえてくる。

「あれ、何の音だろう」

先に口火を切ったのは私だった。

「あの音？」

手元の水で口を湿らせながら彼女は答える。

「サイフォンじゃないかしら。誰かがコーヒーを淹れてるのよ」

そう言われればそんな風に聞こえなくもない。

「私、今どこから時間が湧き出してるような気がしたの。ほら、さっき変な沈黙があったでしょ。そのときに、どこから泉みたいに時間があふれてきて、この空間を作ってる。そう思った」

「青木さん詩人ねえ。普段どんな本読んでるの」

「うーん、基本なんでも読むんだけど、ミステリーが多いかな。後は普通に日本や海外文学」

「あんまり普通じゃないと思うよ、それ。今どきの高校生で」

「そうかな、まだ結構いると思うよ、文学を日常的に読む人。私こないだ電車の中でシャーロックホームズ読んでる高校生見たよ」

「……悪いけどそれって結構読む時期おそくない？ 私多分小学生の時に大体読みおわってたよ」

「……実を言うと私も一瞬そう思った。でも不思議なのはね、なんでボアの『黒猫』とか『アッシャー家の崩壊』を読んでいる人よりもドイルの『まだらの紐』を読んでいる人の方が子供に見えるかってことね」

「それが分かってしまう自分が怖いよ」

スツとマスターがテーブルに寄ってきて、めいめいの前に紅茶とケーキの皿を置き、一礼して去ってゆく。

「なんかあの人がわくつきの古城で執事とかしてそうじゃない？」

「それこそ『アッシャー家』みたいな」

「そう」

二人は神妙な顔をして紅茶を飲み、ケーキを食べた。

「広田さんは普段なに読むの」

「私は専らミステリーとホラー」

「うう、ホラーは苦手」

「でも『アッシャー家』も『黒猫』も読んでるんでしょ」

「それはそうだけど。『黒猫』なんかその後三か月くらい土壁が怖かった」

きやはは、とケーキを口に運びかけた手を止めて彼女は笑う。

「私ぜったいああいう小説の主人公になりたくない。ああいう類の物を読むたびに決意を固めるね」

「ほんと？ 私だったらやりたいな」

「うそ」

「ほんとよ」

ティーカップを右手に持って、彼女はすました顔をしてこちらを見る。

「私、生まれ変わったら小説の主人公になりたいの」

一瞬時が止まった気がした。

生まれ変わったら……いや、生まれ変わっても、だ。

「主人公だったら小説の中で自由でしょう？ 多分一番おいしで役どころだと思うの。恋愛小説なら必ず相手と結ばれ、青春物なら正義の味方になれる」

「ジャンルによっては殺されたり牢屋に入れられちゃったりもするけど」

「いいの。ドラマチックで華があればそれで」

そういつて彼女は紅茶を一口すすする。

「でも、誰にも運命は変えられないものねえ」

生まれ変わっても……何？

「私はちゃんとした生身の人になりたいけど」

言葉を選びながら私は言った。

「でも、未来にはいきたくないな。どっちかというと過去に行きたい」

「みんなに都合のいい時間軸があればいいのにねえ。過去に戻りたい人は過去に行き、未来に進みたい人は未来に行く」

「私歴史が好きなんだよね。好きな時代を見つけるとその時代の事を書いた小説だろうが史跡を訪ねる紀行文だろうが読み漁る。そしてすごく共鳴するの」

「分かるよ。素敵な彼が出てくる恋愛小説を読んで、この女の子になりたいって思うのと一緒でしょ」

「そうやって茶化す」

私がちょっとにらむと、彼女はいたずらっぽく笑いながら目をそらした。

「広田さんこういうのって信じる？ 伝記を読んでいると、とっても親しい人の日記帳を読んでいるような気がするの。その人がひょいと片手を上げて文字の上から挨拶してくる、そんな錯覚に襲われるの。そして、もしかしたら自分の事も書かれているんじゃないかっていう気がする。次のページにフールドをつけい重いガウンを身にまとっている自分の挿絵があるかもしれない、そんな気がする」

「分かるわ」

彼女は両手を頬杖をして、ため息のように言った。そしてそのまま私の方を見た。とび色の瞳が私を見つめる。

「でも、あなたは侍女じゃなかったでしょ？」

\* \* \*

扉が激しく叩かれた。足元に座って縫い物をしていた侍女が、おびえたように彼女を見上げる。そのとび色の瞳に大丈夫、と目で合図をして、彼女は手でずれてフールドを直した。ついでにガウンの襷も整える。侍女が縫い物を置いてこちらに寄って来、よじれた裾を直してくれた。

「ありがとう」

そういうと、侍女は恥ずかしそうに微笑む。捕らえられた時からずっと自分の世話をしてくれていたこの侍女に、彼女は家族のような親しみを抱いていた。あの日、叔父と自分の元に飲み物を持ってきてくれたのもこの侍女だ。

この子を道連れにしてはいけない。

焦れたように扉がまた数度叩かれた。古い錆びた蝶番の付いた薄い扉は、今にも外れそうにがたがたと揺れた。せっかちな兵士たちだ。もう一度侍女に向かって微笑みかけると、彼女は扉の向こうに向かって声を掛けた。

「お入り」

勢いよく扉が開き、三人の兵士が入って来る。隊長らしき口ひげをたくわえた男が、口を開いた。

「お時間です」

彼女はゆっくりと立ち上がった。そのまま背筋を伸ばして数歩歩く。後ろに侍女が付きしたが、来ているのが分かった。口ひげ以外の兵士が素早く動いて私たちの前後についた。

扉を開けるとそこからすぐに急な螺旋階段が続いていた。ガウンとマントを着たまま手すりの無い階段を下りるのは大変で、何度も足を取られた。兵士が肩を支えてくれる。やっとの思いで階下に降りると、そこには大きな重いドアがあった。先頭の口ひげがそれを肩で押して開ける。

まばゆい光と共に、わきおこったのは大きな喚声だった。広場に設えられた大きな舞台のようなところに彼女は立っていた。目の前に見えるのは餌に飢えた動物のような群衆が汚物に群がる蠅のようにひしめき合い、わめき合っていた。

確かにこれは道化の仕事だ。

彼女は胸を張り、改めて笑みを作った。

――姫様。

――何？

――わたくし生まれ変わっても姫様にお仕えますわ。

――いきなり何を言い出すの？

――姫様はこんなふうに一生を終える方ではありませんわ。

まだこんなにお若くて、これからどんな幸せが待っているかわかりませんのに、おかわいそうな姫様。

――そんなに泣かなくてもいいのよ。道化は道化なんだわ。誰にも運命は変えられないもの。

――道化だなんて、そんな、あんまりですわ。

――じゃあ私も言うわね。生まれ変わったら、私、普通の村娘になるのよ。どこにでもある普通の村で、普通の恋をして、普通の幸せを手に入れるの。だから、私侍女はいらないの。

——そんな悲しいこと。

——悲しくないわ。あなたも一緒に村娘になればいいのよ。

二人で一緒に暮らすの。だから泣かないで。

\* \* \*

私は立ち上がっていた。

「思い出した？」

いたずらっぽい目はそのままに彼女は言う。

そうだ。あの絵の左端にいたのは侍女だ。一人は失神し、もう一人は残酷な場面を見まいとするかのように太い柱に手をつけている。ということはあの絵の中央にいたのは私？

美しい音楽が聞こえる。物悲しい笛の音が、私を郷愁へと誘う。音楽は私の横にかかっている絵から聞こえる。道化の少年が笛を吹いているのだ。澄んだ響きと寂しげな調べが私の心を震わせてゆく。

「行きましょう」

いつの間にか隣に彼女が立っていた。

彼女に手を引かれて、私たちは灰色の時の回廊をぬけてゆく。

\* \* \*

扉が激しく叩かれた。足元に座って縫い物をしている侍女が、おびえたように彼女を見上げる。そのとび色の瞳に、大丈夫、と目で合図をして、彼女は手で、ずれたフードを直した。ついでにガウンの襷も整える。侍女が縫い物を置き、こちらに寄ってきた。心なしか顔が青ざめている。

「姫様、わたくしにそのガウンをいただけますか」

何を言っているのか初めは分からなかった。

「わたくしに姫様の身代わりをさせていただきたいんです」

思いつめた瞳、固く結ばれた紅い唇。彼女はまだ若い。私と同じくらい若い。

「いきなり何を言い出すの」

鷹揚に笑って彼女は言った。

「あなたはまだ若い。これからどんな幸せが待っているかわからないわ。私の身代わりになんて……」

「時間がないんです、姫様」

「そうね。もう返事をしなくちゃ。きっと扉の向こうで苛々して……」

「時間がないのよ！」

はっとした。

「いいから言う通りにして。急いでガウンを脱いで私のを着て。私はあなたのマントを着るから。ガウンまで着ている時間がないのよ」

「広田さん……」

「はやく！」

彼女の剣幕におされるようにして私はガウンを着替えた。背中の細かい編み紐に手間取る私から紐がもぎ取られ、手早く結ばれた。

私のマントの裾を長く引き、私のフードを着けた彼女は、かがんでマントの裾からでているベチコートをつまみ、それを細く引き裂いた。

「これで私に目隠しをして」

「でも、広田さん」

「いいのよ。私、ずっと主人公になりたかったの。パッドエンドだっていいの。ドラマチックで華々しければそれでいいの」

焦れたように扉がまた数度叩かれた。古い、錆びた蝶番の付いた薄い扉は、今にも外れそうにがたがたと揺れた。

「ほら、はやく！」

震える手で私は彼女に目隠しをした。目元を白い布で覆われた彼女は、私に向かって艶然と微笑んだ。その時、私はそれが、あの時駅で見た笑顔と同じだということに気づいた。

「お入り」

勢いよく扉が開き、三人の兵士が入ってくる。隊長らしき口ひげをたくわえた男が口を開いた。

「お時間です」

彼女はゆっくりと立ち上がった。そのまま背筋を伸ばして数歩歩く。彼女は堂々としていた。本物の王女のように。うつむいて後ろに付きしたがうと、兵士の一人がさっと後ろに回り込んだのが分かった。

口ひげの兵士が扉を開ける。そこには急な螺旋階段があつて、私たちはそこを下って行って……。

——その後の事は、もう思い出したくない。

私は灰色の世界を彷徨っている。青と灰色が混ざり合い、渦を巻く。白が飛び散り、緑が波打つ。気がつくと、私は小さな部屋の扉の前に立っていた。薄い扉はどこからか吹き込む風邪に呻き声を上げ続け、それは私に彼女と共にいた部屋を思い起こさせた。私は鍵穴に耳を当て、中の様子をうかがった。物音一つしない。冷たいノブを握り、私はゆっくりと扉を開けた。そこには誰もいなかった。

ただ、黒いピアノが一台あった。

私は鍵盤のふたを上げた。長いこと使われていなかったらしく、錆びついた蝶番が嫌な音を立てた。白い綿ぼこりが指を汚す。紅いベルベットの布をめくると、意外にもきれいな鍵盤が姿を現した。象牙色の白鍵に指を置く。

誰にも運命は変えられないものねえ。

生まれ変わったら小説の主人公になるの。

ドラマチックで華やかならそれでいいの。

涙で鍵盤がくもり始めた。唇をかんで、私はキーに指を落とす。自分でも不思議なくらい軽やかに動き、白い鍵の上に私の爪が鮮やかに桜色に添える。目の前がにじんで何も見えない。黒と白が渦巻く。回転。私と彼女とを隔てた回転扉。あの時は目の前にいたのに。美しかった彼女に私は嫉妬したのに。今はもうどこにもいなかった。この世界からも、あの世界からも永遠に消えてしまったのだ。どちらの社会からも、永遠に。

回転扉の前に立つ彼女が見える。紺色のセーラー服、エメラルドグリーンのリボン。喫茶店で話した時のままの彼女だ。白くて長い、王女にふさわしい指が扉に触れる。扉は勢いよく回る。黒髪とリボンが風にはためく。一瞬の後に扉は彼女を飲み込み、後には何も残らなかった。